

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：34509

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25885110

研究課題名(和文) 東アジアの観光と歴史認識：植民地台湾における沖縄系移民をめぐる記憶の継承

研究課題名(英文) Tourism and History in East Asia: On Remembrance of Okinawan Immigrants in Taiwan

研究代表者

松田 ヒロ子 (Matsuda, Hiroko)

神戸学院大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：90708489

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は台湾・基隆市立和平島海浜公園に沖縄系移民を記念する目的で建立された「琉球ウミンチュ像」を取り上げ両地域の市民がいかに日本の台湾統治を解釈して公共的なモニュメントを構築し、それはテーマパークという文脈においていかに解釈されているのか検討する。インタビュー調査と資料調査の結果から、私は「琉球ウミンチュ像」が、現代沖縄と基隆の理念化された公的な地域アイデンティティを具象化していると考えた。「琉球ウミンチュ像」建立は、東北アジア地域の市民的交流の成果として評価されるべき点もあるが、一方で実業家が主体となって建立する歴史モニュメントの建立には限界があることも浮き彫りになった。

研究成果の概要(英文)：The project examines one of the commemorative monuments for colonial settlers in Taiwan-the statue of an Okinawan fisherman standing in the center of Heping Island Marine Park in Jilong City. Heping Island, which used to be called Sharyo Island, received Okinawan as well as fishermen almost immediately after cession of Taiwan to Japan. Based on my own interview and archival research, I conclude that the Ryukyu Fisherman Statue in Heping Marine Park best embodies the officially recognized and idealized historical identities of both contemporary Okinawa and Keelung City. In Northeast Asia today, national borders have once again become the sites of nationalistic conflict. In light of the current situation, some might consider the erection of the Ryukyu Fisherman Statue in Heping Island to be a welcome move at the grassroots level. However, this case has also revealed some problems of touristy monument that is telling the history related to the colonial domination.

研究分野：東アジア地域研究

キーワード：沖縄 台湾 植民地支配 歴史認識 観光

## 1. 研究開始当初の背景

私はこれまでの研究において、日本の琉球列島支配と台湾の植民地支配の連続性と関係性を重視しながら日本帝国主義を再検討してきた。特に、帝国主義的進出における人の移動、特に、政府が直接的・組織的に動員せざるにされた、いわゆる経済移民や出稼ぎ者が日本の植民地統治に果たした役割に注目した。博士論文では、沖縄県八重山地方と植民地下台湾の越境的な社会経済関係を検討した。その過程で私は、植民地台湾経験が戦後の沖縄と台湾との関係の中で意味付けられてきたことを認識するに至った。

さらに、博士論文提出後、沖縄県における植民地台湾の記憶のみならず、台湾における日本植民地主義の記憶の継承についての調査を実施した。すなわち、台北市における日本統治期に日本人移住者の住居として建設された木造家屋の保存運動と古蹟指定をめぐる動きに着目し、現代台湾の日本植民地統治に対する歴史認識と植民地主義の遺産に対する解釈の多層性を明らかにした。そこで私は、日本植民地主義の記憶の継承が、1990年代以降の台湾における多文化主義の台頭と観光業をはじめとするサービス産業の成長と関連していることを論じた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は日本の植民地支配の経験の記憶が、現在の東アジアの政治、経済、社会的利害関係のもとで再構築される様相を明らかにし、現代世界における歴史認識のあり方を検討することである。特に本研究では、日本の植民地支配のもとで行われた沖縄県から台湾への移動経験の記憶が、沖縄県と台湾においてどのように継承されているのかを解明する。事例として2011年に台湾北部の基隆市立和平島海浜公園に沖縄系移民を記念する目的で建立された「琉球ウミンチュ像」をとりあげ、その建立をめぐる沖縄、台湾双方における社会、経済、政治関係を分析する。本事例研究を通じて、近年の沖縄と台湾の政治的、経済的関係を背景に、両地域の市民がいかに日本の台湾統治を解釈して公共的なモニュメントを構築し、それはテーマパークという文脈において沖縄と台湾双方の市民によっていかに解釈されているのかを検討する。

## 3. 研究の方法

本研究はインタビュー調査と文書資料調査の双方を方法として用いる。

(1) 沖縄県で「琉球ウミンチュ像」の建立を主導した市民らに対するインタビュー調査と、沖縄県と台湾の間の経済、文化交流の現状についての文書資料調査とインタビュー調査を実施する。

(2) 台湾側で「琉球ウミンチュ像」の建立を主導した市民、基隆市政府の職員、公園の利用者らに対するインタビュー調査と、台湾の観光開発の現状に関する文書資料調査を実施する。

## 4. 研究成果

(1) 関係者へのインタビュー調査から、琉球ウミンチュ像の建立が計画された経緯を明らかにした。当初1947年2月に発生した二二八事件で犠牲になった「30余名の琉球人」を記念する慰霊碑を基隆市の和平島内にある海浜公園内に建立する計画が持ち上がった。だが、沖縄県在住の被害者の家族の子協力が得られず建立計画は頓挫した。そこで2010年12月頃二二八事件の犠牲者にとどまらず、海浜公園内に無縁仏として祀られている琉球人を慰霊する記念碑を建立する計画が持ち上がったのが、計画の発端である。

(2) 関係者へのインタビュー調査から、琉球ウミンチュ像の建立のために中心的な役割を担ったのが、沖縄県内で中小企業を営む事業者と、戦前に植民地台湾に居住していた引揚者であることが明らかになった。台湾は泡盛をはじめとする沖縄県産品の輸出先として、沖縄県内の企業にとっては極めて重要な貿易相手国のひとつである。インタビュー調査から、琉球ウミンチュ像建立計画に熱心に取り組んだ事業者は、もともと台湾で事業を展開することを計画していたことが明らかになった。また台湾で既に事業をおこなっていたり、事業を計画している事業者も、ウミンチュ像建立に協力したことが明らかになった。

(3) 2011年に海浜公園内で琉球ウミンチュ像の建立式が施行された際、海浜公園は再開発のただ中であつた。その後海浜公園は、バーベキュー施設などの近代的な施設を備えて再オープンしたが、公園の中心部にある広場に立つ琉球ウミンチュ像は公園のシンボリック的存在となったのである。ただしウミンチュ像の歴史的背景について真剣に捉える利用者は現状では少ないと考えられる。

(4) 歴史的にみて、沖縄系移民と台湾人との関係は必ずしも常に友好的であつたわけではない。にもかかわらず、琉球ウミンチュ像は、日本統治期台湾における両者の友好的関係を象徴する存在であるとされる。琉球ウ

ミンチュ像の台座部分には、その歴史的由来が記述されているが、そこには日本の占領や日本が台湾の土地を搾取したことについては一切言及がない。むしろ、それは沖縄系漁民を和平島に住まわせてくれた台湾人の寛大さに対する感謝の意を強調している。

(5) 基隆市政府や基隆文化局が琉球ウミンチュ像を和平島海浜公園の新たなシンボルとしてふさわしいと考えた理由のひとつは、それが日本人ではなく沖縄人(琉球人)を象ったものであったからだと考えられる。沖縄系の移民は日本統治期には、日本人コミュニティの中でエスニック・マイノリティとして差別される存在だった。そのため、沖縄系の漁民がたとえ植民地支配の一端を担ったとはいえ、本土出身者と比較すると、相対的に非抑圧的だと認識されたと思われる。

(6) 琉球ウミンチュ像が台湾において自然と受け入れられた理由のひとつとして、過去20年あまりの間、台湾においては日本植民地期の移民やその功績を「教育者としての日本人移民」や「近代化としての植民地化」として解釈する見方が定着していることが背景にあると考えられる。沖縄系漁民は、たしかに日本統治期にその独特の漁法を台湾の漁民に伝え、それが基隆の漁業の発展につながったと今日では理解されている。そうした沖縄系漁民に対する見方は、台湾における日本人移民をめぐる言説と極めて親和的である。

(7) 和平島海浜公園に建立された琉球ウミンチュ像は、今日と沖縄と台湾双方の理想化された公的な歴史的アイデンティティを具象化したものだと考えられる。

沖縄の日本国内もしくは海外からのイメージは、貧しい、米軍基地が集中している、のんびりした熱帯の島、人気の観光地、など様々である。だが、沖縄県民の自己イメージとはそれらとはやや異なっている。沖縄県は、過去には偉大な海洋国家として中継貿易で栄えたという歴史的アイデンティティを持っており、それが今日の沖縄県の公的な自己イメージとされている。近代に入ってから沖縄県は多くの移民や「出稼ぎ」を県外に送り出したが、その経験も外部とつながる海洋国家としてのアイデンティティと関連づけられ語られることが多い。琉球ウミンチュ像はそうした今日の沖縄県の理想化された歴史アイデンティティを具象化したものだと考えられる。

台湾では過去20年間に、多文化主義国としてのナショナル・アイデンティティを確立しつつある。とくに和平島のある台湾の基

隆市は、国際貿易港としての公的な自己イメージを売り出している。琉球ウミンチュ像はそうした多文化主義的でコスモポリタンな自己イメージを具象化しているといえる。

すなわち、琉球ウミンチュ像は、もともと公園内の廟に祀られている無縁仏を祀るという宗教的な意義を持っていたのだが、慰霊としての意味は実際には小さく、むしろ今日の沖縄と基隆の歴史的アイデンティティを強化する役割としての意義の方が大きいといえるだろう。

(8) 今日、東北アジアの国家間の関係は必ずしも友好的な雰囲気にあるとはいえない。沖縄県内の企業にとって台湾は市場として極めて重要だが、領土問題をはじめとする政治問題が両者の経済関係に悪影響を及ぼすこともある。そのなかで、市民のイニシアティブによって、両者の友好関係を象徴する記念碑が台湾の公的空間に建立されたことは、評価されるべきことだといえる。だが一方で、観光資源としてのモニュメントに植民地期の歴史を刻むには限界があることも明らかになった。琉球ウミンチュ像のような公的な記念碑に職業的な歴史研究者がどのように専門的な知見を提供し、いかにして「移民」という存在から日本の植民地統治の歴史を語らせることができるのか、本事例はその可能性と課題を浮き彫りにしたといえる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

発表者: Hiroko Matsuda

発表表題: Modernizer, Invader, or the Hero of International Exchange?: Re-narrating the Okinawan Fishing Settlement in Colonial Taiwan

発表場所: Annual Meeting of North American Taiwan Studies Association

大会会場: University of Wisconsin, Madison、米国

発表日時: 2014年6月21日

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況（計0件）

〔その他〕

なし

6．研究組織

(1)研究代表者

松田ヒロ子（MATSUDA, Hiroko）

神戸学院大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：90708489

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし